

【本文】

第二十回 「雙の玉児義を結ぶ」
三尺の童子志を演

信乃は庭に人ありて、呼禁るその声を、聞くといへども些も擬議せず、はや刺たてん、と刃を挙るに、筋縮り腕癱麻れて、死を速にすることかなはず。こは朽をし、といく遍か、死んぐ、とするほどに、真先に進むものは、是則別人ならず、嚮にも來つる糠助なり。叶嗟とばかり、騒ぐものから、白刃にやおそれけん、後のかたへ立遶りて、矢庭に信乃を抱禁れは、前なるは暮六龜篠、左右より腕を攬て、聊も動せず。「且この刃を放てよ」といへども信乃は手を緩めず。「おん面は認めども、名告もあはざる伯母君御夫婦、何として來ませしぞや」といはれて龜篠酸鼻、「心つよき親に似て、そなたもさはいふにやあらん。黄童なれどもさかしげ也。みづからよく辨へ給へ。わらはは素より女子の身として、弟が所帯を奪るにあらず。父も弟も討死せし、と風の便りに聞えしころ、切ては親の蹟を立ん、と思ふはかりに暮六どのを、壻に招つゝ幸に、庄園を給はりて、村長さへになり登りし、夫に科はなきぞとよ。尔るに弟は存命て、故郷にかへれど、足蹙たり。職に堪ざる身を見かへらで、吾侪夫婦をいといたう、憎みて義絶せし事は、おのが心の僻にこそ。強顔き弟と思へども、腐爛ても指はきられず。此度御教書破却の越度、いかで親子を救ん、と心を盡す甲斐もなく、番作ははや自殺して、そなたも共にと、衝劄しは、稚ころに似けなき短慮。死るに及ばず、この末を、且聞てよ」と諫れば、暮六臉をしばたゞき、「番作が生前に、わが本来の赤心を、しらせざりしは残念也。切てその子を養ひとりて、女兒濱路を妻せなば、先祖の血絡断絶せず。世にも人にも憎れし、わが身は後やすかりなん。やをれ信乃よく聞けかし。御教書の事、大かたならぬ、越度也とはいひながら、原畜生の所為にして、犬はさら也そのぬしたる、番作が命を隕せば、一切後難あるへからず。縦その子どもらに、おん咎ありといふとも、われ亦よろしく申ときなん。嚮に糠助が走り來て、如此々と告しかは、固より義絶の親族たりとも、自殺の変を聞ながら、なほ讐敵の思ひをせんや、と來て見たればこそはからずも、汝が必死を禁めたれ。はやく刃をおさめよ」と言葉を竭せば、糠助も、共侶に諫めけり。信乃はつら／＼うち聞くに、思ふには似ず伯母夫婦が、よに憑しき慈愛教訓、宝刀の事は一言も、いはざるもこゝろ憎し。皆是われを欺くならん。寔におのが親ながら、人をする事聖の如く、未然に察し給ひぬる、父が遺訓はこれ也けり。かゝれば自殺を思ひとゞまり、且く伯母に養れて、人とならん、と尋思しつゝ、やうやくにつち點頭、「思ひがけなき方々まの、おん慈みを蒙りて、理り逼て禁め給へば、死後れて

候也。鎌倉制度にも及ずして、大刀さへ出すに及ばずは、命に従ひ奉らん」といへば幕六眉根をよせ、「宝刀の事はわれしらす。それはをんなの生贖にて、龜篠が心ひとつに、しかせんとこそいつらめ。親より譲受たる物は、和殿が隨意せざらんや。斯うち解ては親族がひに、心くまなく相譚ふべし。狐疑を散してわがいふよしに、うち任せずや」と真実たちて、三方より諫れば、信乃はいよ／＼こゝろに睨りて、「しからはその手を放ち給へ。聞わきて候」といふに愈々観びて、それが随些退けは、信乃は刃を鞘に納て、膝くみ直せとおちつかぬ、身の久後を思ひ難て、黙然として居たりける。

當下幕六龜篠は、糠助を宿所に走らせ、小廝一兩人喚とりて、葬の事を指揮し、その夜番作が亡散をとり斂めて、幕六は宿所にかへりつ。龜篠糠助はとゞまりて、棺に通夜して信乃を慰め、次の日なき人を、菩提所へ送る程に、里人等これを悼みて、追慕せすといふことなく、この日棺を送るもの、無慮三百餘人なり。「信乃が為にはせめてもの、面目ならん」と人みないひけり。

さて幕六龜篠は、番作が自殺を聞て、みづからその家に赴き、信乃が自殺を禁めし事は、豫て番作が謀りしに違はず。御教書の事は詐欺なるに、大塚親子自殺せは、里人等憤りて、ことの破れになりもやせん。信乃をだに養はゞ、里人等が疑念も解べく、わが身に恙なかるべし。と夫婦猛に商量して、真実やかにもてなすものから、信乃は素よりその性聰察し。父の遺訓に思ひあはせて、その詐欺を猜せしよしは、幕六龜篠はじめには、村雨の大刀の事をいはず。信乃が「大刀さへ出さずは」といひつるをはやうけて、幕六は宝刀といひ、又われはしらすといへり。そのときに言舌濁りて、顔の色さへ変りしかは、信乃はいよ／＼心決して、父の先見明智を感じ、さて自殺をばしりき。これらに由れば信乃はさらなり、番作は智勇の士也。惜かな不幸にして、志を得ざりしかは、珠玉いたづらに泥中に埋れて、名のみ口碑に遺りけり。

問話 休憩、葬の事果しかは、龜篠は又幕六と商量して、信乃を召とらんとて、迎の人を遣せしに、信乃は「せめて亡親の中陰果て後にこそ、命に従ひ奉らめ。且く許させ給へ」といふ。「是も亦理りなれども、黄童一人は置かたし。糠助はその宿所、いとちかきものなれば、朝な夕なに守をさすべし。額藏は年紀も、信乃には劣り勝りせず、言葉敵になるものならん。然らばこの小廝を」とて、「薪水の勞をよく佐けよ」と分付て、信乃がかたへぞ遣しける。さはれ信乃は是さへに、わが本心を探らんとての、問監にや、とおもひしかは、苟にも心を放さず。みづから火を打水を汲み、父母の靈牌につかへつゝ、喪に籠りてをる程に、早晚に花ちりて、若葉色ます青山辺に、杜鵑鳴く比にぞなりぬ。

信乃は日來額藏が、言行にこころをつくるに、よろこび温順にして、村落の小廝に似す。主なる庄官の虎威を借て、われを侮る氣色はなくいと老美に仕しかは、こころに深く感佩して、是より多きは疑はず。有一日額藏は、信乃が垢つき汚れしを見て、「なき人の三十日も、はや過ぎせ給ひしに、髪は結たまはずとも、行水を引給はずや。湯も沸て候は」といはれて信乃はうち點頭「現卯月の暑には、堪がたき事もぞある。けふは南風が吹入れて、搔ざる垢もよれる日ぞかし。よくこそしつれ。浴みせん」とて、臙て縁頬のほとりに立て、衣を脱などする程に、額藏は大監に、湯をなみくと、汲入つゝ水さし試み、やがてその背後に立違りて、徐かに垢を搔んとて、信乃が腕の痣を見て、「和君にもこの痣ある哉。吾侪も又似たることあり。是見給へ」といひかけて、推袖きて背を示すに、現身柱のほとりより、右の胛の下へかけて、黒く大きな痣ありけり。その形状、信乃が痣にこれ一般。そのとき額藏は、袖を収て痒をうち掛「吾侪が痣はみづから見えねど、胎肉よりありと聞り。和君も尔るや」と問に、信乃は只笑て答す。額藏は又縁なす、庭のかたに指して「彼処なる梅樹のほとりに、新に土を起せし」とおほしくて、些高き処あり。彼は什麼何ぞ」と問に、信乃答て、「あれこそ其許にもしられたる、大を埋し処よ」といふ。額藏慚たるおもとちにて、「させる仇にもあらざるに、しつねき人は畜生に、傷けたるにも誇ることあり。吾侪も亦彼大を、打もし、刺もしたらんか、と和君に思れたるなるべし。さもあらすや」と事毎に、心ありげにものいひかくれど、信乃は是にもうち笑のみ。亦その是非をいふことなし。

かくて信乃は浴し果て、まづその衣を揮ひしかば、忽地袂の間より、「一顆の白玉輒び落るを額藏はやくもとり留めて、しつと見て、「不審や、和君はこの玉獲給ひし哉。抑亦家傳の物哉。由來を聞まほしけれ」といひつゝ臙て返すにぞ、信乃は玉を手にとりて、「われ一朝に親を喪ひ、こころの憂ひやるかたなくて、この玉を遺れたり。こはくさぐさの縁故あり」とばかり答て詳に告ねば、額藏こころ歡ばす。数回嘆息し、「人面同じからざれども、他人にもよく似たるものあり。人心同じからざれども、又知己なしといふべからず。和君吾侪を疑ひ給ふや。吾聊も蔽すことなし。是を見給へ」といひかけて、膚なる護身囊より、一顆の玉をとり出せば、信乃も又訝りてこれを掌に受つゝ見るに、わが玉と一点異なることなし。但その文字同じからず、義の字鮮に読れたり。こころに至てはじめて感悟し、恭しくその玉を、額藏に返していふやう、「吾年少く才足ざれば、眼あれどもなきが如く、はやく足下を認らずして、初はふかく疑ひき。日こる歴る隨その言と、行を試するに、わが及ざる所多かり。凡人ならじと思ふものから、素性を問によしなくて、けふまでは黙止たり。尔るにけふはからずも、身に相似たる痣を見つ。又この玉の等しき

あり。必是宿因の致す所。一朝の縁にはあらず。先わが玉の由來を説べし。この玉は箇様々々如く、如く々々の事あり。「と神女影向のはじめより、與四郎犬が死を促して、思はずもその會口より、玉を獲たる終まで、猛に病のいで來し事、父が先見遺訓の趣、些も蔽さず説示せば、額藏は耳を側て、坐に膝の進むを覺す。且感じ、且嘆じて、落涙を禁めあへず。且して貌を改め、「世に薄命なるものわれのみならぬ。和君がうへを聞けば又、後たのもしき心地せり。抑吾侪は伊豆國、北條の莊官たりし、大川衛二則任が二子に、乳名莊之助と呼ばれしもの也。嘗吾侪が生れしときに、家の老僕なりけるもの、その胞衣を埋んとて、鬪の下を掘けるに、ゆくりなくこの玉を獲たり。こは未曾有の祥瑞ならん、と人はみないふれれど、わが背にあやしげなる痣あるをもて父はなほ、心もとなく思ひけん、その吉凶を問んとするに、伊豆にはさせる博士なし。但郷の黄檗寺に、関帝の廟あり。わが父年來信じにければ、まゐりて為に久後の命運を問奉り、念じて神籤を拈けるに、第十九籤を獲たり。その詞に、

総管百事費精神 南北奔馳運未新
玉兔交時當得意 恰如枯木再逢春

とあり。わが父聊文字あり。詞のこゝろを判するに、起句の文吉ならず。只その結句に賴あり。玉兔は月の異名なり。交るときは満月にして、十五夜をいふなるべし。かゝればこの子十三才まで、尋病などにやあらんずらん。しかれども年十五より、回陽本復して、如意延命の祥ならんとて、莊之助と名けし、と母の物がたりに聞つ。莊は莊盛なるのこゝろなるべし。

さる程に鎌倉の武將成氏朝臣、京都將軍とおん中よからず、両管領に攻られて、許我入つばませ給ひしかば、寛正二年に京都より、前將軍普廣院（義教）の第四男、政知とまつせしを、右兵衛督に拜任せられて、伊豆の北條へ下させ給ひ、堀越の御所と唱て、諸國の賞罰を掌せざる。政知朝臣武威に募て、民を憐むのこゝろ薄く、驕奢を極め給ふ程に、不時の課役いと尋かり。わが父莊官たるをもて、舊例を援て、苛政を諫め、しばし宵免を乞ひしかば、讒者の為に弾かれて、御所のおん怒り酷しく、誅せらるべし、と聞えしかば、父はますしうち歎きて、一通の書を遣しつゝ、母にもしらさで自殺せり。時に寛正六年秋九月十一日、吾侪は僅に七歳なり。莊園家財は没官せられ、従類奴婢は東西に離散して、身に隨ふものもなし。さしも豪家といはれたる、大川の水涸果て、妻子を追放せられしかば、母は泣つゝ吾侪が手を掖て、是首の由縁、彼首の相識、と彼此に身を置かねては、いと悲しきその秋を、客宿に送りて霰降る、冬もなかなばになりけり。

粵に安房の國司、里見の家臣蛸崎十郎輝武といふものは、原は彼処の豪民なり。母の従弟であり

しかは、彼壱崎を心あてに、母は吾侪を扶掖ぎ、吾侪は母を慰めつゝ、辛して鎌倉に赴き、安房へ便船を求にけれども、今戦國の最中なれば、海陸の通路たえて、彼処より船を出さず。下総なる行徳の港口には、上総へ渡す船あり、と人が詢て候へば、又行徳をこゝろさして、稍この郷まで来る程に、路費を賊に掠とられて、宿借るべうもあらざれば、已ことを得ず、村長の宿所に赴き、云云のよしを告て、その夜の宿りを乞といへども、しるるゝとき長夫婦、その銭なしと聞しより、撰待客舎もいひ付す、小廂等さへに叱徴して、うけ引へうもあらざれば、切て一夜を柴小屋の、裡になりとも明させ給へ。とかき口説くにも許されず、小廂して追出させ、門さへ社て見かへらす。日ははや暮て雪はふり來ぬ。進退其処に究りて、親は音になく夜の鶴、子は又檐の寒雀

【挿絵】「七歳の小兒客路に母を喪ふ」「犬川衛二が妻」「莊之助」

癖に迷ふ行路の艱難、強顔き人の門ながら、もし呼入るゝこともや、とおぼつかなくも立在は、雪はますゝをやみなく、雪吹に五體を吹きられ、風にとらるゝ破笠の、骨まで氷る冬の夜に、母は固より持病に積あり。秋より後の患苦心労、客宿と共につりゝゝ、病著にとり逼られ、いとも危く見えしかば、勦り騒げど七才児が、何せんすべもしら雪に、先だつ親は果敢なく滅て、よになき人の員に入りしは、十一月廿九日の事なり。空しき骸にとり著て、號哭つゝ天を明せば、長はその為体を、はじめてしりてうち咳き、吾侪を裡面へ呼び入れて、卒實を問れしかば、匿す告るにうちも騒かず、まづわが母の亡骸を、棄るが如く埋させ、その日吾侪を召出し、汝は母を旅に喪ひ、かへるべき家もなく、又ゆくべき里もあらじ。安房の里見は成氏方にて、當所は管領家の采地たり。かゝれば安房へは渡しがたし。汝が母路費を喪ひ、わが門にして死たれば、葬の事何くれとなく、諸雜費夥の没銭あり。汝今よりわれに仕へて、勉てこれを報すは、久後とてもよき事あらじ。さはれ年なほ幼稚し、三四年は倉損也。物の用には立かたからん。尔れば年限も定めかたし。夏は賞布の帷子一ツ、冬は小妻の布子一ツとらすべし。それを過分の給料也と思ひとりて一生涯奉公せよ。給銀とらせぬそのかえには、養殺しにして得させんず、といはれし時は恨しく朽をしき事限りなけれど、繫ぬ舟の楫を絶、よるべき身はいなともいはれず。これより長が小廂にせられて、五年あまり送りにき。しかれども志、農業貨殖を願ふことなく、今戦國の時に生れて、身を立、家を興さずは、よに男子たる甲斐もなし。ともかくもして武士にならん、と思ひ決しは十才の春なり。素より長は狐疑ふかく、物妬みする人なれば、わが本心を顯さず。善悪に就て生命に、違ふことなく愚直を示せば、いと々苛とく使るゝ。奉公の片手業、夜は深るまで手習し、昼は秣を刈序に、人目をしのびゝつゝ、石を拳、木を打て、ひとり擊劍拳法を試み、教なつし

て、とやらかうやら、大刀すちを曉得たり。固よりその志を、傍輩に尚しらせねば、人みな
嘲みて愚蠢といふ。彼等はすべて斗筲の小輩、一郷與に謀るに足らず。豫てぞ思ふ君が俊才。その
孝行さへ聞もしつ、見もせしからに慕しく、これらの人と交らは、億萬人に値偶せんより、憑しか
らん、と思へども、長とは義絶の親族なる、その人の子でをはずれば、間ちかく住へど物もいはれ
ず。折もあらはいかでわが志をしらせん、と思ひしはきのふけふのみならず。尔るに大人の自殺
によりて、忽地に路ひらけ、贖和君の間人にとて、吾侪にこゝへゆけといふ、生命はわが為に
千金にます賜もの也。天の祐と竊に歡ひ、心いそしく来て見れば、和君はふかく疑ひて、日ごろ終
れどもつち解給はず。吾侪も又その意を猜して、寤忽に宿志を告まうさず。且く時節を俟ほどに
良縁竟に空からで、送に異なる肢體の痣、又一雙の白玉さへ、媒妁となりしかば、肝膽を吐こと
を得たり。方是病雀花を啖みて、飛騰の翅を擲ことく、鰐魚雨を受て、唵喞の吻を潤すに似た
り。一生の歡會、何事かこれに過ん。望足りて候」と緯詳に物かたりて、志を示すになん。
信乃はその薄命を、わが身のうへに思ひくらべて、間事毎に嘆賞し、「驚きおもふ和殿の志、わ
がよく及ぶ所にあらず。現この玉が媒妁して、忽地水魚の思ひをなす事、因縁なくはあるべから
ず。譬は今示されし、閔帝籤の詞の結句に、玉兔交時當得意、恰如枯木再逢春とは
今日の事なるべし。夫月を玉に譬、玉を又月に喩ふ、和漢にその證多かり。されば玉兔の交ると
き、當に意を得つべしとは、ふたつの玉が媒妁して、こゝに交を結ぶをいふ歎。枯木再び春にあ
ふとは、今この兩人尤薄命、譬は樹の幹大かた枯て、片枝僅に残るが如し。しかれども不憶
勿頸の友を得て、送に補助られ、名を揚家を興すに至らば、枯木の春にあふにあらずや。後榮共に
しるべきのみ。神は人の求るが為に、鑿納を垂給ふ。閔帝の神慮いとかしこし。又はじめの二句の
こゝろは、尊大人自殺して、和殿母子南北に奔走し、命運且く吉からざるを示し給へり。されば
経営百事費精神。南北奔馳運未新といへり。豈亦奇ならずや」と説示せば、額藏
詞の意を感悟して、信乃が才学の大かたならざるを稱賛し、且着て額を撫ふ、吾侪は僅に手習して
俗字を誦し得たるのみ。文を学ぶの餘力なし。和君の解せ給ふにあらずは、かくまで神慮の灼然
なるを、いかにしてしるよしあらん。願ふは今より和君を師として、竊に学問を奨んに、教給へ
かし」といふ。信乃聞て、頭を掉り、「吾侪は僅に十一歳、襁褓の中より学ぶといふとも、何事をか
しるに足らん。幸に父の遺書あり。和殿もし、学んとならば、貸すべし。願ふに人は善悪を友と
す。善に善友あり、悪に悪友あり。擇て志同きときは、四海みな兄弟なり。吾侪は孤となり
つ、和殿も又同胞なし。今より義を結て、兄弟とならんことを願ふのみ。和殿のこゝろいかにぞや」

と問れて額藏大きに歡ひ、「それは固より願ふ所なり。よしや樂を共にせずとも、憂を與にせざるこ
となく、艱難死をもて相救ふ。もし聊もこの盟に背かは、天雷立地にわれを撃ん。こゝに恭し
く上天に告。急々如律令」と天に向ひて誓ひしかは、信乃も又大きに歡ひ、もろ共に誓ひつゝ、水
をもて酒に擬へ、汲かはしてその約を固し、さてその年の冬少を問に、額藏は長祿三年
二月朔日に生れて、十二才也。信乃は七个月劣りしかは、則、額藏を兄とし、信乃は再拜して、み
づから弟と稱しつゝ、共に歡ひを竭しけり。

さはれ額藏は上坐にをらず。信乃又頻にすゝむれば、額藏頭をうち掉て、「年の冬少はとまれ
かくまれ、その才をもていへば、おん身こそわが兄なれ。莫逆をもて兄弟たり。長少の座は定む
へからず。嚮に告たるごとく、わが乳名は壯之助也。いまだ實名をつけられず。おもふにおん身
は孝をもて、一郷に聞え給へり。且その実名は戌孝ならずや。これに由てか彼白玉に、孝の字ある
も、寔に奇也。又わが玉には義の字あり。父は大川衛二則任といへり。よりてわが乳名、壯之助の
の字を省き、大川壯助義任と名告るべし。しかれどもこれらのよしを、人に告べきことにはあら
ず。只われとおん身とのみ。欲する所義に仗て、名を汚さじと思ふはいかに」と問れて信乃はう
ち點頭、「名は主人に従ふもの也。義任尤しかるべし。人めばかりはなほ額藏と、呼びもせん呼
れ給へ」といへば莞尔とうち笑て、「それは勿論の事也かし。おん身とわれと月をかさねて、起ぶし
を共にせしかは、陽には親しくすべからず。長夫婦に對ひては、われをりゝおん身を護らん。お
ん身は吾身を嘲り給へ。かくの如くするとき、嫌疑をその間に置ず、送に後やすかりなん。われ
既に聞ることあり、その故は箇様々々」と糠助が篋に、賺されてかへりしとき、曇六がいひつる
事、その為体を詳に告、「そのとき吾は曇子の間に、陽睡して緯みな聞つ。寔におん身の先考
は、人をしるの先見卓し。行状國士無雙といはまし。をしむべし」といひあへず。頻に嗟嘆し
たりしかは、信乃も共に嘆息し、「吾は父の遺命にしたがひ、宝刀を護て、腹くるぎ、伯母の家
に同居せば、おん身が資によらずして、宝刀を奪れざることを難し。示はるゝ緯の趣、そのこと
を得て候」と恭しく諾ひしかは、額藏且く沈吟し、「しからはわれ又おん身とゝもに、久くこゝ
に在ん事、後々の為にわろし。翌は病に假托て、一たび、母屋へ皈りなん。おん身も中陰果るを
またず、凡三十五日にして、はやく伯母御に身をよせ給へ。既に義を結びては、おん身が父はわ
が父也。けふより心喪に服て、報恩謝徳の信を竭さん。何でふ女々しく花を手向、経を誦のみ孝と
せんや」と奨して、共に番作が靈牌を拝しつゝ、この日の事を告る折から、覺然と足音して、外面
より來るものありけり。この人は誰ぞ。看官三輯嗣次の日を等。更に次の巻の端に鮮なん。

作者云、予この巻を草するとき、或人側より閲して、難じて云、信乃莊助等、英智宏才ありといふとも、原是黄口の孺子、その年いまだ十五に足らず。しかるに智辨甚卓し。絶て童子の氣象なし。寓言といふとも甚過たり。蓋小説は、よく人情を鑿をもて、見る人倦す。今この二子の傳の如きは、情に悖るにあらずや、といへり。予答ていふ。しからず。蒲衣は八才にして、舜の師たり。翠子は五歳にして、禹を佐く。伯益五才にして、火を掌り、項橐五歳にして、孔子の師たり。いにしへの聖賢、生ながらにして、明智俊才、億万人に傑出す。固より夙惠の列にはあらず。この他の神童又多かり。謝在杭嘗集録して、一編の文采をなせり。今毛挙るに違あらず。『五雜俎』中において見るべし。八犬士の如きも、亦これに亜もの歟。便是予が戯に、その列傳を作る所以也。

又いふ。蛭崎十郎輝武が溺死は、長祿二年の事也。又犬川莊助が父、衛二が自殺せしは、それより八年を歴て、寛正六年の事也。しかれども海陸の路絶て、衛二が妻は、輝武が死をしらず。安房へ赴んとて、逆旅に身まかれり。婦幼の疑惑を解ん為、筆の序に自評すといふ。

家傳神女湯 一包代百銅 婦人諸病の良劑にして第一産前産後ちのみちに即功ありよのつねのふり出し薬と同からず功のうこの書の前集にくはしく載たればこゝに畧す

精製奇應丸 偽薬をのぞき去り真物をえらみ家傳のかげんを守りて分量すべて法にしたがひ製法尤つゝしめりこゝをもてその功神の如し別に能書あり今畧之 大包装銀貳朱 中包装壹匁五分 小包代五分 但はした賣不仕候

婦人つきむしの妙薬 毎月つきむしにいたためらるゝに用ひて即功神のごとし産後のをりものくだりかねたるに用ひて尤よし 壹包六十四銅 半包三十貳銅

製薬并ニ弘所 江戸元飯田町中阪下南側四方みそ店向 瀧澤氏製 「乾坤一草亭」

取次所 江戸芝神明前いつみや市兵衛 大坂心齋橋筋唐物町かはちや太助

里見八犬傳第二輯卷之五終

編述 著作堂馬琴稿本「乾坤一草亭」

總卷浄書 千形仲道謄寫

画像 柳川重信繪畫「柳川」

繡像挿入 朝倉伊八郎刊

曲亭新著画像國字小説書目 山青堂開版

美濃舊衣八丈綺談 北嵩重宣画 全本五册 お駒才三郎が奇談を作り設け因果の二字をもて局を結
べり。実に未曾有の稗説也

南總里見八犬土傳 柳川重信画 初輯 全五册 甲戌の冬開版賣出しおき申候

朝夷巡鷹記初編 歌川豊廣画 全五册 乙亥の春開版つり出しおき申候

里見八犬傳第二輯 柳川重信画 全五册發行

朝夷巡鷹記第二輯 歌川豊廣画 全五册 近日嗣次開版追々賣出し可申候

里見八犬傳第三輯 歌川豊廣画 全五册 來丑の冬月無遅滞賣出し可申候

文化十三年歲次丙子ノ冬十二月吉日發版

刊行書肆

大坂心齋橋筋唐物町 河内屋太助

江戸馬食町三丁目 若林清兵衛

江戸本所松坂町二丁目 平林庄五郎

筋違御門外神田平永町 山崎平八